

ちょっと…… ブレイクしませんか?

ディアボロス 悪魔の扉 [1997年 米国]

第 27 回

イソップ寓話集に「狼と山羊」と題する小話がある。山羊が崖の上で草を食^はんでいるのを狼が見つけたが、側^{そば}へ行けないものだから、うっかり落ちたりしないよう下へ降りておいで、と勧めた。ここの草地の方が上等で、青々とよく茂っている、というのである。すると山羊が答えるには「私をご馳走に呼んでくれるのではない、自分が餌に困っているのだ」



今回紹介する「ディアボロス 悪魔の扉」(1997年 米国)と題する作品はオカルト風で相当に怖い。田舎町で法廷での無敗記録を伸ばし続けていた若手弁護士ケヴィン(キアヌ・リーヴス)は大都会NYの法律事務所長ミルトン(アル・パチーノ)に見込まれ役員待遇で迎え入れられ、おまけに用意された豪壮なマンション、洗練された隣人達。若い夫婦の未来は明るいかに見えた。

事務所の上得意である不動産王アレキサンダーが妻子殺害の容疑で逮捕され、この事件の弁護を任せられたケヴィンは裁判の準備に忙殺されて家に帰れない日が続く。メアリーは慣れない都会暮らしと孤独な日々で次第に心に変調をきたす。妻の介護休暇を取ってはという所長の助言を断ってケヴィンは仕事に没頭する。メアリーを心配してNYにやって来たケヴィンの母親はマンションでミルトンとすれ違った時にふと閃くものがあった。メアリーは奇想天外な悪夢を見るようになり心は確実に病に蝕まれていく。そんな中、同僚弁護士がジョギング中にホームレスに撲殺された。彼は出世できない腹いせに事務所ぐるみの国際的不正を暴露しようとしていたのだ。そのことをケヴィンに伝えようとしたFBIの捜査官も彼の目の前で自動車の轢かれて死ぬ。

ケヴィンは裁判を前にしてアレキサンダーが罪を犯していることを確信し、その苦悩をミルトンに打ち明けるが彼は「ついに黒星か」と言うだけ。虚栄心に惑わされたケヴィンはアレキサンダーの秘書に偽証をさせて勝訴する。悪魔に魂を売った瞬間だった。

その後の展開が鬼気迫る。母親にミルトンがお前の本当の父親なのだと告げられたケヴィンは彼が全ての元凶だと確信し事務所に向かった。果たしてミルトンはケヴィンに世界を征服しようと持ちかける。ケヴィンはミルトンに服従するかに思わせておいて持参した拳銃で自らのこめかみを撃ち抜くのがだった。…気が付くとケヴィンはフロリダ州の裁判所にいた。今までのことは白昼夢だったのだろうか。

大都会ニューヨークを舞台に、悪魔が法曹界の黒幕となり若き弁護士の魂を狙うという訴訟王国米国ならではの作品だ。「狼と山羊」のように、人間の場合でもすべてお見とおしの人所で悪事を働く時は、企みも役には立たないのだが、甘い誘いには罠がある。建築物の耐震偽装、食材産地詐称など産業界でも悪魔に魂を売る事件が時々世間を賑わしている。くわばらくわばら。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長